

## —物の見方、考え方— 経営に生かす仏教哲学

青木伸雄

### 1. まえがき

大学で、これからの日本を担う若者に対して教鞭をとって、最近、特に思うことは、コミュニケーション能力とヒヤリング能力の劣しい若者が増加している気がしてならない。

それは、すべての調査研究事項等に対しての解答にみられる。

特に実社会では全く先の見えない海図のない社会であるということ。自己中心的にならない為にとるべき最善の方法は、困りの人々とコミュニケーションをとり、良く聞く耳、いわゆるヒヤリング能力をもって、独善主義にならないことであると考え。

企業の経営者や管理者は、時として他人の利害や立場を顧みずにことを進めることがあり、結果として、それがトラブルの原因になっていると思われる。

そこで、「物の見方、考え方」の基本的アプローチの仕方について考えてみることにする。

独善主義にならない「物の見方、考え方」とは、

#### 1) 物事を空間的に捉え考察する

これは、物事がある一面、いわゆる部分的に捉えるのではなく、全面的、多面的に捉え考えることである。結果として片よらない捉え方となる。

#### 2) 物事を時間的に捉え考察する

この基本的な考え方は、物事を時系列に考え把握することで、過去、現在、未来にわたってどう変化するか予想をする考え方である。

#### 3) 物事を本質的に捉え考察する

この考え方は、ともすると枝葉末節（物事の本質からはずれた、ささいな部分や事柄）にこだわること。あるいは、川の本流のことを考えず支流や分流のみに

こだわり本質を見失うことにならない考え方で物事を考察することである。

以上の三つの考え方で、物事を捉え考察することが重要だと仏教では教えている。

結果として独善的な考え方にならない。基本的にその思想の底流にあるのは「他思故有我」、いわゆる「他の人々を思い考える故に、その存在がある」ということで、近江商人の経営哲学に通じ、「三方良し」という「自分にとっても良く、相手にとっても良く、世の中にとっても良い」という考え方につながるのである。この三つのアプローチの仕方について理解し、活用をはかってもらいたいものである。

### 2. 悟無好悪を学ぶ

縁あって、鎌倉の臨済宗総本山建長寺〔山号は巨福山、建長元年（1249）北条時頼が中国宋の西蜀の僧、蘭溪道隆に開山、創建させた。鎌倉五山の第1。〕の開山以来、初めての「達磨画展」に「悟無好悪」の菩提達磨画の掛軸を出展した。

縁とは異なるもので、蘭溪道隆は日本最初の禅師号である大覚禅師の勅諭を受けた禅僧である。愚生の禅画の大師、平岡白堂先生は中国高山少林寺より日本人として最初の法名をいただいている。

この白堂先生の詩画集の発刊記念の推薦人に、建長寺の吉田正道管長、平山郁夫芸大学長と愚生のようなものまで名をつらねる仏縁をえたことである。

如何に縁というものが人生において大切であるかは語るまでもあるまい。

出展の菩提達磨に書いた「悟無好悪」という語は、「悟れば物事に好悪は無い」という「信心銘」の中の教えで、物事の好いとか悪いとかいう事象に対して決定する基準をすべて捨て去り、へたな判断をしない物の見方、考え方を実践しなさい。何にも縛られずにあるがままに現実を認める心のあり方を説いた教えである。

結果として、建長寺の吉田管長、平山学長、平岡白堂先生との縁の話になってしまった。

これからの経営者や管理者は、人脈が仕事の発展につながる人が多いと考えられる。

人脈とは仏縁である。縁とは先のエレクトロヒート No. 159 に述べている通り因縁生起のことであり、一切の事物は固定的な実体をもたず、いろんな原因（因）や条件（縁）によって成り立っているのである。

この因縁生起の根本思想が仏教の教えである。それは、人間の一生を通じて、なにびとといえども、己一人では生きてゆけないということであり、人間社会に

著者：広島大学生物生産学部講師  
元近畿大学産業理工学部客員教授  
日本禅画家協会名誉理事  
中国少林書画院名誉教授  
法号位 法印 禅画位 奥伝  
青木伸雄  
(野風生)  
雅号 樹泉